

明治30年代前半の《東朝》《時事》の読者層

——商工読者層を中心に——

山 本 武 利

本稿は明治30年代前半の《東朝》（東京朝日新聞）《時事》（時事新報）の読者層に関する一試論である。両紙を含めた6紙の商工読者層についても検討される¹⁾。

1) 拙稿「明治30年代前半の新聞読者層」（「新聞学評論」1966年号）では、《万朝》（万朝報）《報知》（報知新聞）《読売》（読売新聞）3紙それぞれの読者層構造を詳細に検討し、《東朝》《時事》《日本》（日本新聞）の3紙については、それぞれの構造の特徴を概説するにとどまった。また商工読者層の検討も十分に展開するだけの余裕がなかった。本稿と前稿とは相互補完の関係にあり、問題意識、方法、その他に関しては、前稿《序章》を参照されたい。

I 《東朝》の読者層

明治30年代前半は、日清戦争時の戦況速報競争が惹起した報道重視の傾向がいっそう進捗し、《日本》《読売》のような一部特定の知識人階層に支持された新聞を除いて、各紙が言論中心から報道中心へと新聞内容の質的転換を遂行する時期である。《大朝》（大阪朝日新聞）の編集方針を踏襲して20年代初期に創刊され、《時事》とともに他紙に先がけて情報の《鮮度》維持に努力していた《東朝》にとっては、まさに歓迎すべき時節到来といえよう¹⁾。《東朝》はこの30年代に入るとまもなく、《大朝》と並行して紙面内容と編集体制の一層の改革を断行した。30年1月《大朝》経営担当の上野理一は《東朝》担当の村山竜平に書簡を送り、その中で《一、幾分ノ紙幅ヲ拡張シテ雑報及広告等顧客ニ対シ多少ノ満足ヲ与ヘン為メ物価ヲ附録（従来ノ如ク全紙四分ノ一）トスル事。一、尚報道ノ迅速記事ノ斬新ヲ期スル為メ従来ノ八頁ヲ二分シテ其第一版ハ従来ノ如ク配達シ其二版ヲ午後一時ヲ期シ当地ヲ発送シル。之ヲ要スル日ニ二回ノ配達ヲナス事²⁾》と提案している。物価附録新設、2版制採用というこの改革の意図は経済情報の量的、質的向上によって商工読者層という《顧客》に《多少ノ満足ヲ与ヘン為メ》であった。

第1表 明治31年の6紙の読者層 単位：百人

新聞	階層	商人	商店小僧	実業家	会社銀行員	学生	教員	官吏	兵士	農民	下層	ほか	計
東朝	朝	134	17	26	0	77	8	0	77	51	26	103	519
時事	朝	168	72	36	36	6	0	48	30	24	42	36	498
万朝	朝	200	100	0	0	300	0	0	50	50	350	0	1,050
報知	知	50	44	5	0	33	0	16	25	21	10	36	240
読売	売	31	31	0	6	68	8	3	3	0	12	21	183
日本	日	0	0	10	0	10	42	20	0	31	0	42	155
計		583	264	77	42	494	58	87	185	177	440	238	2,645

- 1) 内務省統計報告書（明治31年度）では年間発行部数が出ているため、1年の発行日数を300日とみて1日当りの部数を計算。
- 2) 明治31年の各新聞のハガキ投書欄からの抽出標本数はつぎの通り。
 《東朝》61 《時事》83 《万朝》21 《報知》152 《読売》168 《日本》15
 この抽出結果と1日当りの発行部数から各階層の読者数を算出。
- 3) 新聞《読書慣習》には階層ごとに多様性があるため概括困難。ただ読者数>発行部数は各階層に共通するが、ここでは便宜的に読者数=発行部数とみなす。

第1表の《東朝》読者層構造の特徴は、商人を中軸にして、学生、兵士などの階層へかなりバラツキを見せていることである。村山がこの時期に紙面改革のために巨額の資金を投入していた最大の理由は、当時の新聞読者層の最大基盤であり、しかも《東朝》読者層の中軸である商工読者層の維持、拡大にあった³⁾。《東朝》は《大朝》という本拠を持っていたために、関西方面の商況の報道では東京の他紙を圧倒していた⁴⁾。この迅速、豊富な関西経済情報が、関東の商工読者に歓迎されていたと思われる。しかし全国ならびに海外の経済情報になると《時事》や《中外》(中外商業新報)に量、質とも一歩譲っていた。その反映か、第1表では商工読者の層は《時事》よりも薄く、とりわけ会社銀行員読者が少ない。しかも中核である商人読者の多くは中小商人読者であり、大商人読者は少なかったと推測される⁵⁾。しかし2紙を除けば《東朝》の経済記事は、東京の新聞界ではすぐれていた方である。《勇肌》の中小商人読者の愛読紙である《万朝》はともかく、《東朝》が第1表が示すように《報知》や《読売》以上に商人階層に購読されていた理由はここにある。後に引用するように、新聞小説や娯楽記事などへは手厳しい批判が読者から投げられているが、経済記事への批判や要望の投書はまったく見当たらない。経済記事充実への不断の諸改革が、次第に中小商人読者の経済記事への《新聞意識》をとらえてきたようだ。この時期にいたってようやく《東朝》は商工階層に基盤を固めはじめたわけである。

小泉信三は《『朝日』が日本の知識階層が必ず読む新聞のようになったのは、何時頃からのことか、私の記憶ではやはり夏目漱石の入社（明治四十年）が、大きな事の一つとして印せられている》⁶⁾と回想している。これは小泉のみならず同時代人に共

通する読者層観である。当時の知識人読者の《新聞意識》には、政治論説と新聞小説という二重構造が見られ、《日本》が前者に《読売》が後者にそれぞれ根底をすえていた。ところがこの時期になると各紙が自称《不偏不党》の政治論説を競って掲げ⁷⁾小説や講談の連載をはじめた。《東朝》もその例にもれず、《公平無私》＝《不偏不党》⁸⁾の政治論説や反硯友社派の通俗小説をのせていた。この編集方針は商工読者や家庭読者に歓迎されていたが、知識人読者の強い支持を得るにはいたらなかった。主義主張の不明確な是非主義の編集方針で調理された論説は、論客の不在も加わって、知識人読者にとって《東朝》を魅力あるものたらしめなかった。しかし少数ながらも一部の知識人読者はこの方針を支持していたと思われる。第1表程度に学生読者は存在していたようである⁹⁾。かれらは《公平無私》の論説を支持すると同時に、《鮮度》の高い政治記事、経済記事も愛読していたのかもしれない。絶対数は少ないが、この種の《新聞意識》を持つ知識人読者の胎動には注目すべきである。

さらに《東朝》の知識人読者の層を限定したのは、文学水準の高い小説の欠如である。《僕は大切な新聞紙に古めかしき小説杯を連載さるるには実に当惑仕候。夫れよりは当世人士の論文又は詩歌杯を蒐集し、之れを小説紙面の代りに連載しては如何にや》(31年12月25日)《東朝》には、半井桃水や饗庭篁村などが通俗的、大衆的な小説を連載していた。これらは教育水準の高い知識人読者の文学意識には物足りない小説であり、かれらから批判されるのは当然だろう。批判の矢は小説ばかりに向けられるのではない。《一芸人の芸の巧拙に関し貴重紙面を塞ぐは、我々貧生購読者には実に迷惑千万》(31年11月23日)という娯楽記事偏重への批判も寄せられる。かれらは大衆小説を排除して《論文又は詩歌》を要求し、娯楽記事に代替するものとして《貴重紙面》を要求している。しかしこれら批判する知識人読者の《新聞意識》が、鋭い論理の政治論説や文学水準の高い小説に傾斜しているのか、それとも《鮮度》の高い報道記事や《公平無私》の論説に傾斜しているのか、判別不可能である。ともかくこの種の批判の顕著化は、知識人読者の漸増を示唆している。

《東朝》には《三、五面に閑文字は可成に多けれども其処を買ふ読者も少からぬ事なるべし》¹⁰⁾ということだ。《大朝》の《三面記事》や小説、すなわち《閑文字》の読者は主婦、子どもなど家庭読者に多かったが、《東朝》も同様であろう¹¹⁾。しかし経済記事最優先のためか、《万朝》のような《勇肌》的娯楽記事の多様性が見られない。《僕は朝日新聞愛読者なれ共、義太夫語物案内なき故、国民又は万朝など求むること度々あり。甚だ不便故、以後紙末に御掲載ありたし》(31年12月28日)という要望の投書も出てくる¹²⁾。第1表で下層読者が少ないのも当然だろう。娯楽記事や《三面記事》は下層読者よりも商家中心の家庭読者を対象にしていたようだ。その意味で《家庭新聞》の色彩も少しあるが、《報知》ほど濃くはない。

第1表では農民や兵士の読者が多いが、他紙の場合と同様かれらの実態について推測させてくれる資料は見当たらない。

ともかく《東朝》の読者層構造の要は第1表が示してくれるようだ。中小商人読者の中核に、実業家、学生、家庭読者などへ広がっている。大商人や会社銀行員読者が少ないために、商工読者の層全体には《時事》ほどの厚みはない。知識人読者は学生を中心とする少数勢力であった。下層読者も少なかったようだ。読者は各階層へかなりばらついてはいるが、中小商人読者を除けば、その開拓の深度は浅かったため、《万朝》に発行部数で大きく水をあけられていた。紙面内容も読者層構造を反映して、経済記事を中心に政治、娯楽記事から政治論説や小説、講談にいたるまで《多数の気受けを落さ》¹⁸⁾ないように平均的な配慮をしている。しかしあらゆる階層を読者対象に設定しようという姿勢が強すぎるために、紙面内容からはきわだった特徴が消えてしまう。特徴のない紙面内容と《不偏不党》的編集方針を現代の新聞の《特徴》とみなせば、その《原型》を30年代前半あたりの《東朝》の中を探ることができるかもしれない。しかしその検討作業は本稿の課題ではない。

1) 報道機能が重視される時期においては、商品としての新聞情報は時間の経過に反比例してその価値を遞減する。そのため鮮魚、生野菜などの商品と同様にその《鮮度》が重視される。《東朝》は創刊2年後の明治23年にマリノニ輪転機を導入し、日本最初に新聞の直接的生産過程における道具から機械への移行を完成した。また流過程においても、運輸交通業の活用、販売組織の整備に努力していた。前者は生産時間の短縮、後者は流通時間の短縮に積極的に寄与した。この意味で20年代前半において、《東朝》経営者は情報の《鮮度》維持が至上命令となった10年後の東京新聞界の動向を適確に予測し、対処していたといえよう。

2) 朝日新聞社史編修室編「上野理一伝」昭和34年 499頁

3) 《村山竜平が今日の成功ある、其記事を正確迅速に報道することを努めたからであることは勿論である。併し要するに之れは金という一字に帰着する……彼は「新聞即ち金なり」の秘訣を得て居るではないか》(正岡猶一「新聞社の裏面」明治34年 45~46頁)《正確迅速に報道》する新聞への商工読者層の《新聞意識》を村山は鋭敏に把握し、それを反映した紙面作成のために資金を投下していた。

4) 32年の東京、大阪間長距離電話開通後20日間の職業別電話利用状況によれば、《新聞社》が全発信度数の45.5%も占めていた(「電信協会会誌」明治32年4月号)その大部分が両《朝日》であったことは、この時期から従来の《電報》欄に代って《大阪電話》、《東京電話》欄が両紙の経済欄に大きく登場してきたことからわかる。

5) 《各銀行が日曜大祭日毎に休業されるには不便で甚だ困ります。大祭日の外年中無休業にしては如何でせう》(31年11月29日)という《一貧商》読者からの投書が《東朝》に掲載されている。しかるに《時事》では《全国中の銀行はすべて土曜日も平日の通り業務を執るに独り日本銀行に限り半日休業するは何故な

るや》(31年6月14日)という《銀行有志一同》読者からの投書がある。これらの投書はそれぞれ両紙の商工読者の投書内容を全体的に代表するものであり、前者は普通銀行と取引する中小商工読者の、後者は日本銀行と取引する大商工読者の多数の存在を端的に推測させる素材となる。

6) 「週刊朝日」昭和33年5月14日号

7) 32年8月創刊の《富士新聞は政党の機関に非ず、政府の御用にも非ず、不偏不党。恐れず憚らず、報道機敏論評厳正也》(《東朝》32年8月14日)と広告している。《報道機敏》とともに《不偏不党》を自称しなければ新聞を創刊できなくなったのが、30年代前半の東京新聞界の状況である。

8) 明治19年に制定された《朝日新聞通規》はその《新聞紙ノ主旨及目的》の第1章で、《本社新聞紙ハ公平無私ヲ以テ旨トシ世上ノ耳目トナルヲ本分トス》(朝日新聞社史編修室編 前掲書 310頁)と記している。この編集方針は30年代前半にも貫徹されており、《我東京朝日新聞の不羈独立にして豪も偏することなく、正確敏捷にして些も欺くことなく、而して其最も趣味に富めるは日々の紙上之を証して余りあり》(31年12月29日)と自讃している。《公平無私》＝《不羈独立》＝《不偏不党》と等値にみなしてもよからう。

9) 《貴社が常に学生の為に警告を与へらるるは感謝の外なし。去る廿六日社説の学生避暑法の如き如何にも有益にして読者を猛省せしむるに足れり》(32年7月31日)という投書がある。学生読者の層がかなり厚かったことは、学生階層を対象にしたこのような社説をわざわざ掲載していることから判明する。

10) 雑誌「太陽」明治33年7月号

11) 《大朝》は《発行許可願書》で《勸善懲惡ノ趣旨ヲ以テ専ラ俗人婦女子ヲ教化ニ導ク》(朝日新聞社編「朝日新聞七十年小史」昭和24年 2頁)と述べている。《公平無私》の報道新聞と娯楽本位の《小新聞》の両面を並存させて発展してきた《大朝》が、30年代前半において創刊時の理念通り家庭読者の支持を得ていたことは、《東京大阪の新聞の中には「朝日新聞」が第一である。これは重に小説を見るために婦人に好まれる》(雑誌「文庫」33年10月25日号での三重県松阪の読書界通信)からも推測できる。《東朝》の家庭読者に関する直接的な資料は皆無であるが、紙面内容が両紙ほぼ共通していることから考えて、中小商家の家庭読者はかなりいただろう。

12) この投書を批判する投書が掲載されている。《嗚呼浮世とは云ひながら、貴重なる新聞紙に義太夫連載云々とは実に涙がコボレ升》(32年1月6日)おそらく知識人の系譜に属する読者からの投書であろうが、推測の域を出ない。

13) 雑誌「中央公論」明治32年6月号の《東朝》評

Ⅰ 《時事》の読者層

第1表の特徴は商人、商店小僧、実業家、会社銀行員など商工読者が多いことだ。

実業家や会社銀行員読者は他紙では少ないが、《時事》ではかなり大きい比重を占めていることが注目される。学生や教員の読者は少ないが、官吏読者は多い。

《東京の新聞では「時事新報」が第一で、当地の商家、会社、銀行などは大抵購読》¹⁾というのが大阪の状態だった。東京に関する資料はないが、大阪以上に商家、会社などで購読されていたと思われる。株式、期米、生糸などの商況はもとより、内外の金融、為替相場、さらには政府の財政金融政策、財界の動向など、経済情報が《東洋一》と誇称する広い紙面に大量に注ぎ込まれていた。しかもその《鮮度》は高く、かつ正確であった。量、質ともに経済専門紙《中外》に劣らない。また社説欄には経済論のみならず経済解説さえものっている。さらに《本日掲載の広告目録》欄の存在が象徴するように、広告は絶対的、相対的に他紙を圧していた。他紙には少ない決算報告、経済商業雑誌の広告、さらには企業の《制度的広告》などが目立つ。しかも《広告に関する記事を掲げて商人の参考に資すると同時に、各商店に勤めて営業案内を掲げしめ面倒な手数料を厭はずして成るべく広告の道を盛ならしめんことを勤め》²⁾ていた。これら特徴ある紙面内容と広告から《時事》が商人、実業家など個人の商工読者のみならず、商家、会社などの法人の商工読者をも対象にしていることが判明する。

《時事》は《上品な編輯振と正確な記事との為の上流社会に信用を得ていた》³⁾定価は《万朝》の2倍強である。広告分量が多く、発行部数がふつうなのに、広告料はかなり高い⁴⁾(第2表参照)つまり読者は高い購読料を支払い、広告商品を購入しうる経済力があつたのだ。中上層すなわち大商人、実業家、会社銀行員⁵⁾、高級官吏などの階層に強く支持されていたことがわかる。

正確、迅速、豊富の三拍子そろった経済政治情報とともに、それら情報を選択、処理する《独立不羈》という編集方針も中上層読者に信頼されていた一要因と思われる。福沢は《時事新報第五千号》(明治30年9月1日)で、《新聞紙の種類多きと共に其変遷も亦限りなき其中に、独り我時事新報は十五年嘗て趣旨を变ぜざる……真実独立不羈の新聞社にして、発兌の趣旨に従て固く自から守る外、苟めにも他を敵視したることなし》と回顧している。実際、創刊以来この時期にいたるまで、《一身一家の独立より之を拓めて一国の独立に及ぼさんとする精神》⁶⁾を根本理念とする《独立不羈》の編集方針は堅持されていたようだ。この時期になると《福沢の発言に接するためにこの新聞を購読》⁷⁾する読者は相対的に低下しただろうが、福沢は《時事》の一貫した《独立不羈》の提言に賛同し、全幅の信頼を寄せる読者もいぜん存続していた⁸⁾。しかしこの《独立不羈》的論説だけに傾斜する《新聞意識》の系譜は後退したとはいえ、その反面《独立不羈》方針で編集される経済、政治記事への《新聞意識》は、中上層

第2表 6紙の定価、広告料、頁数

新聞	定 価(銭)		広告料(銭)	頁数
	1部	1カ月		
東朝	1.5	33	25	8
時事	2.5	50	第1面30ほか25	12~16
万朝	1	24	45	4
報知	1.5	35	25	6
読売	2	35	20	6~8
日本	2	40	25	6~8

明治31年11月1日現在

の読者とくに商工読者層の中に強く根をはりはじめたと思われる。自己の経済行動、社会行動に高度の判断力を要し、大きな社会的影響力を持つ中上層の商工読者にとって、信頼に足りうる情報は必要不可欠であった。そして《時事》がかれらの需要を満たしたのである。つまり《時事》は《報道の多面迅速、議論の常識円滑、商況の正確》⁹⁾という紙面内容によって、発展する資本主義の強力な担い手である商業資本家、産業資本家の信頼を得て、商工階層の新聞としての性格を強めてきたのである。

《時事》は《書生を相手とせず、政治家を目的とせず、中等社会を読者と為す》¹⁰⁾とみなされていた。第1表でも学生読者は少ない。高い定価と経済色の濃い紙面とが相乗効果となって《時事》から学生読者を排除したのであろう。安倍能成のように《学生時代、食客をした家では時事新報を取って》¹¹⁾いたために《時事》に接触しえた学生読者もいただろうが、一般の学生読者の《新聞意識》には無縁に近い存在の新聞であった。教員読者についても同様のことがいえよう。《時事》の学生、教員読者は《独立不羈》の編集方針を支持する者か、福沢の論説に魅力を感じる者であったらう。

第1表では下層読者が多い。《時事》には《三面記事》や娯楽記事も一応掲載されていたが、これらは商工読者を対象にした《閑文字》である。《時事》に接触しうる下層階層は、中上層の家庭に雇用されている車夫あたりに限定されるであろう。そのため下層読者の実数は第1表の数字以下であろう。なお商店小僧(番頭、店員も含む)の読者は、奉公先の商家で購読する《時事》に接触する機会が多い。商家は営業規模に比例して商店小僧を雇用しているので、大中商人読者の多い《時事》で第1表程度の商店小僧読者が抽出されるのは当然であろう。ただ会社銀行員読者との相違は、自宅で購読する者が僅少だったことにある。

《時事新報と東京朝日新聞とは其記事の公平にして其議論の妥当なる事に於て最も信用篤き新聞》¹²⁾といわれていた。前者は中上層の、後者は中下層の商工読者に信用されていた。なお中規模経営の商工階層において両紙は競合していたようだ。経済力のある《時事》の商工読者は《中外》を併読するのみならず、経済雑誌、商業雑誌をも購読していたと推測される¹³⁾。

1) 「文庫」(33年3月20日号)の大阪読者からの地方読書界通信

2) 《時事》33年1月1日。なお福沢論吉は創刊以来、商店、企業における広告の重要性を再三強調しており、たとえば19年3月の東京の諸新聞に《何程抜目なき商人にても広告を為さずして商利を博することは六ヶ敷。広告に種々方法ある中にも、新聞紙を利用するに越すものなきは世界中の定論なり。而して又其用に供する新聞紙は最も発行部数の多いものを選ぶ事勿論なれども、発行部数の多きに兼ねて又其新聞紙を購読する者の富有上流の人物なる事を要すなり。何となれば商人の最も望を属する所の相手は社会下等の人物に非ずして富有上流の人々にあれば也》(博報堂編「広告六十年」昭和30年 44頁)と、《時事》広告欄の媒体

価値の大きさを宣伝広告している。

- 3) 生方敏郎「明治大正見聞史」大正15年 114~115頁
- 4) 翌年の32年には広告料第1面40銭、他面30銭となる（前稿第3表参照）なお「時事」や「朝日」や「万朝」となるとせいぜい一割位しか割引しないから通信社の儲けも案外少ないが「毎日」「中央」「報知」「読売」などと来ると……三割四割位は引くので随分儲かる」（正岡猶一 前掲書 117頁）は当時の新聞社と広告代理店との契約関係を伝える珍しい資料である。発行部数抜群の「万朝」は別格として、商工読者の購読紙「時事」「東朝」が広告界にも権威のあったことがわかる。
- 5) 当時生成期にあった会社銀行員階層はまさに社会の「新中間層」であり、資本家、実業家への道も開かれていたし、給与所得も多かった。かれらは会社、銀行で「時事」に接触しえし、かれら自身も家庭で購読することができた。
- 6) 「時事新報発兌之趣旨」（明治15年3月15日掲載）の一部分。なお「時事新報の主義は不偏不党にして、文明の進歩智徳の増進を図るを以て自から任ずる」（34年1月1日）と自己規定しているが、「時事」のいう「不偏不党」＝「独立不羈」は「文明の進歩智徳の増進」という一貫した主張と論理を持っている点で他紙のそれとは質的に異なっている。たとえば「東朝」の「公平無私」という「不偏不党」主義は主張のない是非主義であり、無責任主義と表裏一体の関係にある。しかるに「独立不羈」精神の貫徹したものが「時事」の「不偏不党」主義であり、そこにはかなり明確な価値判断基準があるため、読者に対するある程度の責任意識が裏打ちされていると思われる。
- 7) 荒瀬豊「村山竜平伝」（日高編「マスメディアの先駆者」昭38年 所収）212頁
- 8) 「時事」が「慶応義塾同窓会新報」的機能をも兼ねて創刊されたことは、「発兌之辞」からも読みとれるし、30年代前半にいたってもその機能を持続していたことは「慶応義塾同窓諸君ニ告グ」形式の記事が散見されることからわかる。明治34年の「福沢先生の歿後其の発行紙数と広告件数を漸く減少し行く由なり。先生が生前感化の大以て知るべし」（無名氏「新聞記者」明治35年 142頁）は、同窓生読者を含む福沢個人で持っていた「時事」の読者がかなり存続していたことを示唆している。もちろん読者の絶対数の増加でこの種の「福沢宗」信仰読者の比率は低下していただろう。
- 9) 「中央公論」明治34年11月号
- 10) 鳥谷部春汀編「春汀全集」第2巻（明治42年 278頁）所収の「時事新報」論（明治29年執筆のもの）
- 11) 「週刊朝日」前掲号
- 12) 「太陽」明治32年9月号（「樗牛全集」第4巻 明治38年 810頁 所収）
- 13) 「時事」は中上層の商工読者の中軸に、一部の知識人読者にも進出していたた

めに、商工読者のみに限定される《中外》に比べ読者層の幅は広く、発行部数も多かったようだ（「内務省統計報告」によれば、明治31年の《中外》の年間発行部数は111,934千部であるのに対し、《時事》は14,864千部である）両紙を併読する商工階層は《実業家の親切なる忠告者》（明治28年11月の《発行の趣旨》）たらんとして創刊された《東洋経済新報》や《東京経済雑誌》などの経済雑誌や《商業世界》に代表される商業雑誌も購読していた。前者は実業家や会社銀行員に、後者は大中商人に多く読者を見出していたと思われる。《時事》にこれらの雑誌が広告されていることもこれを証左する。

Ⅲ 明治30年代前半の商工読者層の若干の傾向

当時の新聞読者層の中で、商人読者層が最大の階層であったことは、第1表が示す通りである。かれらはこの時期になると経済情報への関心、欲求にかられて新聞を購読するようになる。つまり新聞小説や《三面記事》への関心よりも、正確+迅速+豊富な経済記事への関心の方が強まったのである。この《新聞意識》構造の転換は、資本制生産様式の全産業部門とくに流通過程への浸透によって起つた。産業資本確立期といわれるこの時期には、資本主義の枠外にいた一部の商人階層へも、その経済変動の波がおし寄せてきたのである。商人階層も次第に多極化の様相を帯びてくる。資産内容、営業規模に応じて大、中、小に階層分解する。また商業資本と産業資本の相互転換も生じる。商店小僧と会社銀行員との職種上の識別も可能になってくる。ともかくこれら多極化する商工階層の新聞読者では、経済情報への関心は中小商人よりも大商人読者に、商人よりも実業家読者の方が強く、また商店小僧よりも会社銀行員読者の方が強い。つまり商工読者の経済情報への《新聞意識》の強弱は、かれらの資本主義経済との絡み合いの度合によって規定されてきたのである。ただ実業家や会社銀行員階層はこの時期の産業資本の確立にともなって抬頭してきたので、商人や商店小僧階層よりも階層人口は絶対的の少なく、読者層もおのずから限られていた。

《万朝》を除く5紙では、商工読者数は経済記事内容と相関している。経済記事を重視した《時事》では多く、逆にそれを軽視した《日本》ではきわめて少ない。この相関の度合は実業家や会社銀行員読者の方に顕著である。かれらは経済記事内容の量、質そろった《時事》を購読し、その劣悪な《日本》はむろんのこと《万朝》までもあまり購読しない。また大商人読者は《時事》に多く、中小商人読者は《東朝》や《時事》に集まっている。つまり資本主義経済との密着度の高い実業家や大商人読者は、合理的、効果的な経営判断、商機判断を行なうために、すなわち自己の経済行動から極大の利潤を追求するために、内外の景気変動や金融市場などの高度の経済情報を新聞に欲求するのである。30年代前半での傾向としてここでとくに注目したいのは、中小商人読者の《新聞意識》が大商人や実業家読者のそれに接近してきたことである。かれらも資産の維持、拡大のために、新聞の供給する経済情報に着目しはじめたので

ある。株商の株式情報、米商の期米情報の利用がその典型例だ。この時期になると、大中小を問はず、進取的な商工読者にとっての新聞購読の効用価値は経済情報によって大きく規定されてきたわけである。最大の読者層たる商工読者層を金城湯池にするため各新聞等実業に関する記事に就いて夫々読者を満足せしめ（無名氏 前掲書 155頁）るようになった。この傾向をすでに先取していた《時事》《東朝》でも、30年代に入ってから版数の増加、長距離電話の活用、年中無休刊制の完全実施などによって、経済記事の充実とくに情報の《鮮度》維持に努力していた。《日本》を除く各紙も遅ればせながら、この意識構造の変動に対処しはじめたのである。

つぎにこの時期に各紙が《不偏不党》主義を自称しはじめた背景の一つに、商工読者の量的増加が考えられる。明治期の資本主義経済は、藩閥政府の殖産興業政策とそれに便乗した政商的商工階層によって推進されてきた。産業資本の政治過程に対する相対的独自性は、30年代に入って萌芽してくるが、一般の商工階層の企業家的精神構造には、むしろ政治を理解し、利用しようという姿勢の方が強かったのである。かれら政商にとって、政府の経済政策に便乗して経済的利益を増大させるためには、政府に関する正確かつ迅速な情報が不可欠であった。その情報源は主に新聞であり、その情報は政府や政党色から可能な限り絶縁された《無色透明》である方が好都合である。《不偏不党》的情報の方が客観的な経営判断材料となる。つまり《無色透明》な政治経済情報を求める商工読者が量的に増加したことが、新聞内容の《不偏不党》化の一要因になったと思われる。もちろん東京の新聞界で《政党機関紙》的要素が払拭されてくる最大の要因は、知識人読者の《新聞意識》の質的变化であろうが……。

経済記事に対する商工読者の関心、欲求が高まる反面、《三面記事》や新聞小説へのそれはやや低下しているようだ。《万朝》では艶種が、《報知》では通俗小説がいぜん商工読者に愛読されていた。かれらの多くは中小商人読者であるが、《東朝》のそれとはちがって、営業活動領域も狭く、経済情報を新聞に求める切実さは感じられない。かれらは10年代以来の《小新聞》読者と同一系譜にある。一方《時事》や《東朝》も《三面記事》や小説などに他紙に劣らぬ資金を注ぎ、その充実を努めていた。しかしこれらの紙面は商工読者が余暇に読む《閑文字》にすぎず、重心はあくまで経済政治記事の充実には置かれていた。つまりこれらの新聞の商工読者は《不偏不党》的経済政治記事を欲求し、《閑文字》への欲求は第二義的な位置しか占めていないのである。しかし《万朝》や《報知》さらには《読売》の中小商工読者の《新聞意識》も30年代に入ると次第に《時事》や《東朝》の商工読者のそれに接近しつつあった。

ともかく30年代前半の商工読者層のもっとも注目される傾向は、産業革命の進行にともなう商工階層の増大と分解を背景に、かれらの経済情報への欲求、関心が強まったことだ。それとともに文学や論説の比重は低下してきた。つまり資本主義と新聞とが相関しはじめたこと、すなわち新聞が資本主義体制の枠内に入りはじめたことを、新聞読者層という視角からも展望できるのである。（1966. 10）